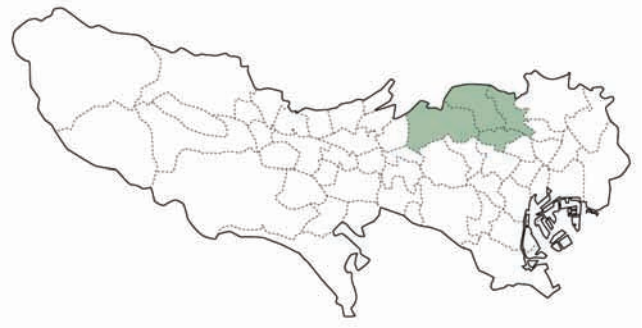
JIA城北地域会からの地域紹介と活動報告

KNIT

ニット

1



城北地域会について

城北地域会は豊島・練馬・板橋・北区の4区とその周辺からなる城北地域の特性を生かした諸活動を展開しようとする地域会です。2007年の設立を機に、地域会会員の活動が、会員個々がよく地域の実情に精通しているという特性から、地域に関係の深い問題に関わるようになってきました。特に、城北地域4区全体を総括する視点の活動のほか、各区や各地域に特化した、分科会的な単位で、地域との連携や協働する活動も積極的に行なっています。会員各人が市民として、またJIA城北地域会会員として、豊かな地域づくりのために地域の建築家として何ができるか試行錯誤の行動をしています。

C O N T E N T S

特集：石神井川（磯部 和久／久間 常生／林 秀司）

序文・・・・・1

石神井川を軸として石神井地区をみる・・・・・・2

01解放された連続空間軸としての石神井川・・・・4

02環境ポテンシャルとしての石神井公園・・・・6

03緑のある住環境・・・・・7

石神井川の過去・現在・未来とは・・・・・8

石神井川が流れる街・・・・・11

《練馬区リポート》練馬区地域による「まちづくり活動」・・・・・12

《北区リポート》北区・・・・・13

《板橋区リポート》赤塚城跡・・・・・14

《豊島区リポート》豊島区における「まちづくり活動」・・・・・・16

コラム：東京都23区の順番・・・・・・18

城北地域会活動報告：まち歩き・・・・・・19

特集 石神井川

今回の特集は、城北地域会の4区を東西に結ぶ自然の軸線、石神井川を取り上げました。図は、東京都が作成しているハザードマップ（流域浸水予想区域図）です。

これをみると、小平市内のゴルフ場付近を源とした水の流れは、小平、西東京、練馬、板橋、北の2市3区を経てJR王子駅の東側で隅田川に合流します。豊島区には流れそのものは通っていませんが、図で示されるように目白通り以北の多くが流域に含まれています。現在の行政区境が定まる以前の昔から、地勢的にこの川を中心とした流域生活圏として、城北4区が共通点を有し今につながっているのがわかります。

私たちはこの共通点、つながりに着目し、この川を通じて幅広くまちづくりの観点から地域を見つめていこうと思います。石神井川に関しては、既に様々な立場から多くの調査、研究、活動等があります。城北地域会では、地元で活動する建築家集団として、自分たちが日常生活し活動するこの地域で、景観や環境など、まちの良さ・魅力を再発見し今後の地域のまちづくりに少しでも貢献をしたいと考えています。

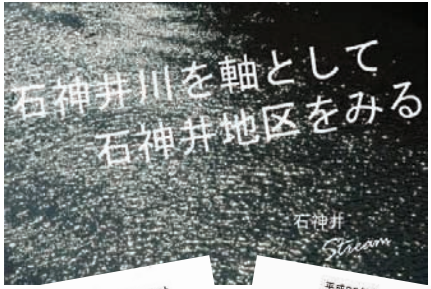
その皮切りに2008年最下流の北区音無親水公園をまち歩き調査しました。そして本年、最も大きな流域を有する練馬区の中流域石神井付近で緑豊かなエリアを探索しました。本特集ではこの石神井地域を中心に、主に空間特性、環境、緑の観点から紹介し、その魅力を確かめたいと思います。

（久間　常生）

石神井川を軸として石神井地区をみる

石神井川については既に多くが語られ、多くの手が施されてきた。

下にみるのは、その関係資料のほんの一例であるが、ここで改めて、石神井川を基軸にして、「流れ」や「連続性」の視点で石神井地区の概観を眺めてみたい。



景観構成要素

01 開放された連続空間軸としての石神井川

02 環境ポテンシャルとしての石神井公園
- （レベル1）
- （レベル2）

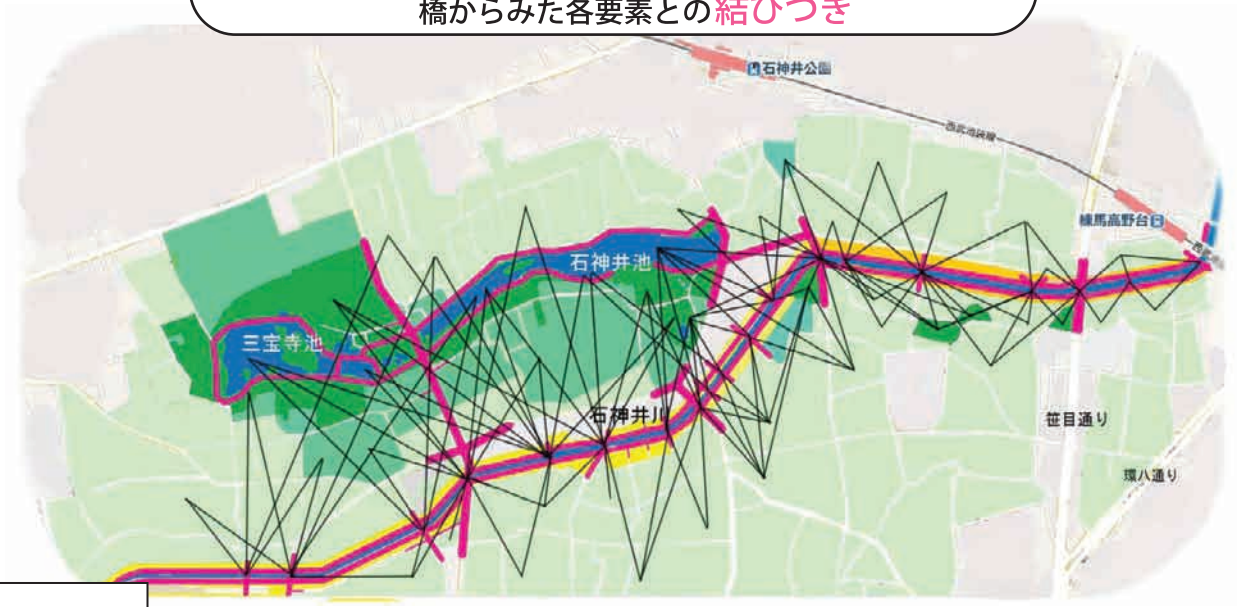
03 緑のある住環境

アイテム

（関連性の結びつけ）

- 橋
- 段丘下位・低位面
- 段丘と遺跡
- 緩傾斜護岸
- 親水護岸
- ワンド
- 水際環境
- ビオトープ配慮
- 生物（植物、他）
- 水の流れ・水質
- 風（空気）の流れ・水質
- VISTA(展望・眺望)
- 森・並木・植込
- 沼沢植物群落
- 石神井城址
- 神社（厳島神社・氷川神社）
- 寺院（三宝寺・道場寺・禅定院・十善戒寺・観蔵院）
- 屋敷林・憩いの森
- 農地・生産緑地
- 環境共生
- 道空間

石神井川を軸にした石神井地区の景観構成要素と橋からみた各要素との結びつき



景観構成要素

01
- 開放された連続空間軸（親水系）
- 開放された連続空間軸

02
- 環境ポテンシャル（レベル1）
- 環境ポテンシャル（レベル2）

03
- 緑のある住環境

石神井川を軸とした場合の
- 人の流れ
- 視線の流れ
- 風（空気）の流れ

上図の放射状の細い黒線

↓

石神井川に架けられた橋からみた各構成要素との結びつきを意味する。
線の密度が何を示唆すると思いますか？

◆

橋を渡って南北が結びつく。渡るときに石神井川の開放されたcorridorとしての連続空間を意識する。視線の流れ・風（空気）の流れ・人の流れを感じる。場合によっては橋から川の沿道に足を向ける。

01 開放された連続空間軸としての石神井川

石神井川：緩傾斜・親水化護岸

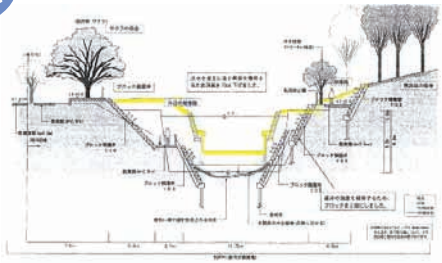
水の流れ

下流域の流れ

空（空気）の流れ

上流域の住宅と開放空間としての石神井川

視線の流れ



やや上流域のワンド状護岸

自生植生による自然回復が増えている

団地前の茂みに入る風

人の動きと流れ

沿道をサイクリング
（左側：石神井川）

緩傾斜護岸で日光浴

平成みあい橋

三面張りの川を体験(18.8) ※2

石神井川でメダカを(H21.7) ※2

少年石神井川探検隊：川流れ(H21.8) ※2

石神井川で手づくり燈籠流し(H21.8) ※2

手前が石神井川
奥が元締山緑地

水辺のビオトープづくり ※2

カルガモが増えてきた

緩傾斜護岸で親子水辺観察会(H9.8) ※1

石神井川に接した長光寺公園

（※1『ふれあい石神井川』から）
（※2『川と水辺を楽しむ
プロジェクト 2010』から）

02 環境ポテンシャルとしての石神井公園

環境ポテンシャルとなる太古からの自然(レベル1)とそれ隣接して発生した古来からの崇拝の場、神社・寺院(レベル2)。

これらは周辺にできる住環境に強烈な潜在力としてのインパクトを与える。

レベル2

禅定院(後ろが石神井公園)

地下水の流入

レベル1

三宝寺池

稲荷神社

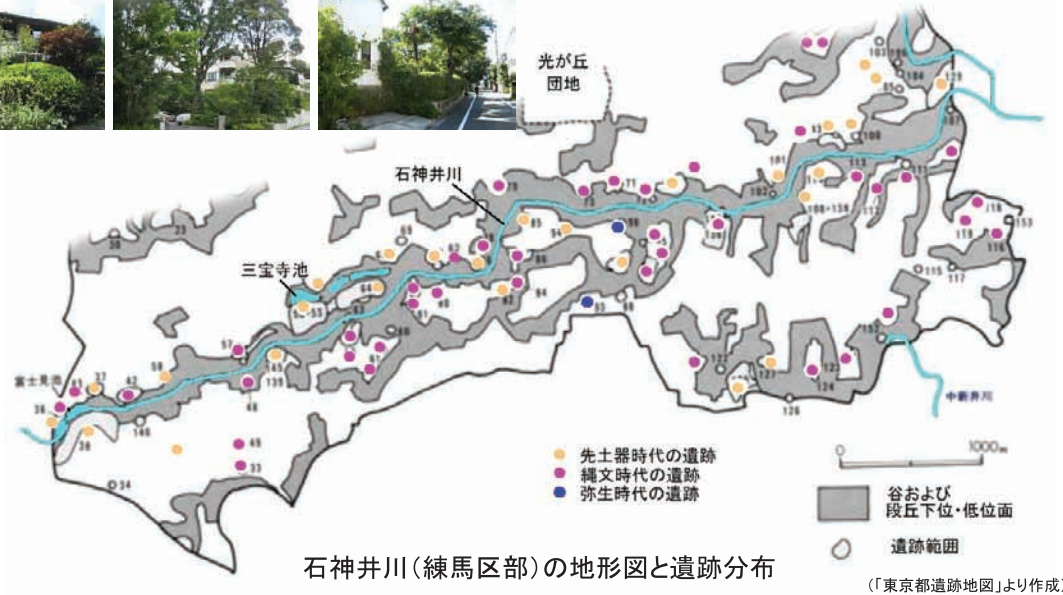
03 緑のある住環境

武蔵野台地にできた石神井のまちと石神井川。それは古代からすでに始まっていた。

古代の人々は生活用の水を得るため、川沿いに集まり、川の水面より高い段丘に　生活した。

下の地形(段丘)図と遺跡分布図にみるように、その関係を見事に語っている。

段丘はそのまま住宅地として発展するが、石神井公園と石神井川の自然はその住環境の構成に共生のポテンシャルとして強く働いている。



石神井川(練馬区部)の地形図と遺跡分布

(「東京都遺跡地図」より作成)

昭和22年の石神井周辺

石神井川の過去・現在・未来とは

石神井川の流域からは先土器時代、縄文・弥生・奈良・平安に至るまでの遺跡があり、古代から人が住みつづけていたことがわかります。

石神井の流域開発を本格的に行なったのは、11世紀から太田道灌に滅ぼされるまでの約400年間にわたって、今の東京23区北西部を治めていた豊島氏といわれています。豊島一族は系統的に用水路を引き、石神井川周辺の水田開発を行いました。その後、江戸・明治と引き継がれ、昭和30年代まで米作が行なわれていました。

水田風景は昭和30年代まで見られましたが、急速な都市化の進行により水田は消滅し、畑も次第に宅地化へと向かいました。しかし、現在でも住宅地の間に残されたキャベツ畑の風景があちこちで見られ、石神井地域の景観の特徴になっています。

昭和31年　石神井川南田中付近

昭和32年　石神井川長光橋付近

昭和32年　石神井川水門

石神井川は小平市鈴木町を最上流部とし、西東京市、練馬区、板橋区、北区を通り隅田川にいたるまでの総延長25.2kmの河川です。石神井川の起源は古く、流域から先史時代（3～1万年前）の遺跡が発見されています。また、ひとが定住するために欠くことのできない水源を巡って、石神井川争奪戦が幾度となく繰り返され、下流部で流路の変更があったことも歴史研究から明らかにされています。

石神井川と街の移り変わり

昭和20年の地図と平成5年の地図を見比べると、土地利用の変化が見えてきます。

（昭和20年の石神井）

石神井川は細かく蛇行しながら西から東へと流れ、三宝寺池の湧水を水源とする石神井池からの流れ（三宝寺川）と合流します。流域に広がる水田に水路を巡らし、灌漑用水として利用さていました。石神井公園駅近くには街が形成されているものの、周辺は農地の中に農家の屋敷が点在する田園地帯であることが分かります。水田は昭和30年代まで見られましたが、急速な都市化の進行により水田は消滅し、残された畑も次第に宅地化へと向かいました。

（平成5年の石神井）

地域全体的に宅地化が進み、農地は住宅地の中に僅かに畑が残るのみです。都市化とともに下水道の容量を超えた雨水が石神井川に流れ込むようになります。この雨水を処理するために川幅を広げ、直線化しました。宅地化と道路の舗装により雨水の地下浸透が減少したことで三宝寺池の湧水は枯れてしまいました。

三宝寺川から石神井川に合流していた部分は暗渠になり地上部は「和田掘緑道」として整備されました。（左の写真）

昭和31年　山下橋近

平成23年の山下橋付近
親水化・ワンド・自然川床化・水辺空間
の拡大多様化をはかる

平成23年の蛍橋付川岸
のグリーンベルト

昭和31年　山下橋近

平成23年の平成みあい箸

環境としての石神井川へ

昭和54年　石神井川改修工事

平成23年の蛍橋付近50mm
未整備区間

平成9年　手前に石神井池
奥に石神井川を望む

昭和31年の石神井公園北側住宅地

平成19年　石神井公園を望む

平成23年の石神井公園北側住宅地

石神井川が流れる街

三宝寺池は湧水によってできた天然の池ですが、石神井池は地主さんの発意による住宅地開発の一環として昭和8年に三宝寺池から流れる水路を広げ、地域の人々が造った人工の池です。公園には三宝寺池沼沢植物群をはじめとする各種の植物や野鳥などの自然を観察したり、散策を楽しむ多くの人が訪れます。また、石神井池を見下ろす南斜面には高級住宅地が形成され、緑と水辺のある魅力的な景観を生み出しています。

練馬区、板橋区、北区を流れる石神井川を軸として、流域が豊かな水と緑の回廊で繋がれたらそれぞれの地域の暮らしにもっと潤いが生まれるのではないでしょうか。

練馬区地域における「まちづくり活動」

住民参加の公営住宅建替計画のあった名古屋からの夜行列車内で「まちづくり」の素地が行き渡ることを夢見てから数年後、’97年春に区議会選挙候補者の「住民参加で都市マスを作りましょう」との声に引き付けられた。「真鶴町美の条例」が都市計画学会賞に輝いたことを喜んでいる矢先であった。その後、政治的中立の立場で、まちづくり構想を市民政治団体の支援と協力を得て数人の仲間と考え準備し、’98年1月に「練馬まちづくりの会」を設立し林泰義氏講演とワークショップをその川切とし、NPO法施行後NPO法人となった。

次年度は「まちづくり講座」で共に学び仲間を増やすことを意図し、「みんなで楽しくまちづくり」の延藤安弘氏、「環境共生型の住環境とまちづくり」の岩村和夫氏、「都市マスって何？」の野口和雄氏、「都市マスタープランからまちづくり条例へ」の中林一樹氏、「市民版マスタープランの実践と理論」の渡辺俊一氏、そして「マスタープランを通じた公共事業コントロール」の五十嵐敬喜氏と実現し、’99年度には区も講座を開催し、区民参加で2000年から’06年にかけて都市マス策定、まちづくり条例制定、まちづくりセンター設立に到った。

練馬まちづくり活動助成の区民審査委員として見守り学び続け、今年度で6年目となる。当会の磯部氏や林氏や久間氏も実践する住民参加の公共空間づくりを目指す活動等多岐にわたり、夢も驚きもある「まちづくり」が、行政も動かし、協働の車輪が回り始めている。

（武田実代子）

音無親水公園

北区

音無親水公園（北区王子本町）
石神井川の水路を整備し、昭和63年に開園。
川の上・中・下流をかたどった園内では、かつてこの近辺にあった権現の滝、舟串橋が姿を変えて復元されている。
平成元年「日本の都市公園100選」
同2年「手づくり郷土賞」
（隅田川との合流地点まで1400m）

隅田川との合流点（北区堀船）
都立小金井公園付近にその源から25.1kmの地点。流域に様々な文化や歴史、繁栄をもたらした石神井川もあと少しで隅田川に合流。
上空は平成14年12月に開通した首都高速中央環状王子線。
（隅田川との合流地点まで100m）　（鈴木　和貴）

隅田川との合流点

赤塚城跡

赤塚城跡

先日、JIA城北地域会主催のまち歩きが石神井地区で開催され私も参加しました。その際、石神井公園の石神井池と三宝寺池の間にある石神井城址を訪ね、ふと私の住む近くの城跡とそこの雰囲気が似ていることに気づきました。私は板橋区赤塚に住んでおり、周辺で最も気にいっている場所が赤塚城跡です。赤塚城跡は板橋崖線で形成されている都立赤塚公園の西端部に位置し、城はその地形を利用し建てられてたようです。現在は建物は無く広場となっていて、このぽつんと空いた雰囲気が私は特にお気に入りです。また崖下の堀があったであろう位置には、溜池の公園として整備され、東側のニの郭であろう部分は梅林があり、梅の時期には大変な賑わいを見せております。西側は斜面地となっていて、そこには立派な竹林があり一瞬、京都に居るような錯覚に陥らせてくれます。

そんな赤塚城跡のことを詳しく知りたいと思い、調べておりますと、石神井城址との関連があることが判りました。共に存在したのは中世と呼ばれる室町、鎌倉時代であり、赤塚城は1456年に下総国を追われた千葉自胤の居城として記録されています。その際にはすでに赤塚の城は存在していたそうです。千葉自胤は太田道灌と結び各地で勢力を伸ばしてゆき1477年に石神井城の豊島泰経を攻め石神井城を落城させました。千葉氏はその後小田原の北条氏に従いましたが、1590年の豊臣秀吉の小田原攻めによる北条氏滅亡と徳川家康の江戸入府により廃城となりました。両方の城跡からは共通の哀愁が感じられます。

（信原　利行）

溜池公園

西の竹林

豊島区における「まちづくり活動」

目白地域にコミュニティ道路を！

目白地域 みちとまちの会 活動報告

平成２２年６月～平成２３年３月

景観・環境のまちづくりを目指して・・・

地域発信の提案と行政との協働。目白地域・みちとまちの会は「歩行者主役の生活道路（コミュニティ道路）を住宅地に取り戻す」を目指しました。
「道がキレイになるとまちもキレイになる」を合言葉に、まちの景観・環境を整え、まちの個性を創りだす、その一連の活動の「受け皿づくり」と「研究」が目的です。対象は、目白の全住宅地を貫通する約２kmの区道「仮称：目白古道（北と南）＋目白小学校北側道路」。これらはいずれも地域外の通り抜け交通がかなり多くを占め、その半数近くが速度違反という結果が、交通調査で出ています。

この道路は、地域内の歩行者・自転車が集中する路線でもあり、安全上の対策も望まれ、歩車共存道への希望がひろがっています。

またそれぞれの道筋は、その地域の背骨のような存在で、生 活上の軸です。そして地域資産がその周辺に多く見出せ、 個性へつなぐことも可能です。「明日の住宅地のあるべき姿」を求め、研究・提案するのにふさわしい道筋・沿道空間と言えるでしょう。

目白地域にコミュニティ道路を創る3つのキーワード！

キーワード1　沿道を生活空間に、
家から道へ生活空間が広がる、コミュニティ意識も育つ

キーワード2　魅力あるまちが地域評価・住まいの価値を高める
公の道と私的沿道空間、その双方の改善でまちの魅力をつくる

キーワード3　地域の個性を活かす
地域の文化・歴史を育む・・・・目白らしさを大切に

主催：目白地域・みちとまちの会

目白２丁目～５丁目の全町会と目白まちづくり倶楽部が連携するまちづくり連絡会です。
明治通りから山手通りまで貫通する区道を安全で快適な生活道路とすべく研究協議し、地域の受け皿づくりを進めています。

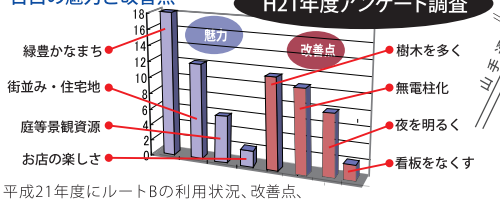
豊島区長所信表明に本活動が取り上げられました！

2011年2月10日区議会本会議での高野豊島区長の所信表明において当活動が取り上げられました。内容は以下です。

『さる1月29日、「目白地域・みちとまちの会」の主催による『目白・まちづくりフォーラム』が開催されました。目白地域のすべての町会や有志の皆さんが主体となり、コミュニティ道路づくりなど生活道路の安全・安心と住環境の改善に向け積極的に取り組む姿は、豊島区が目指すセーフコミュニティの精神に通じるものです。この地区では、平成24年8月から目白小学校の子どもたちが旧真和中学校の仮校舎に通う予定ですので、こうした機会を捉え、目白地区の生活道路の安全確保の手始めとしまして、コミュニティ道路として積極的に取り組んでまいりたいと考えています。』

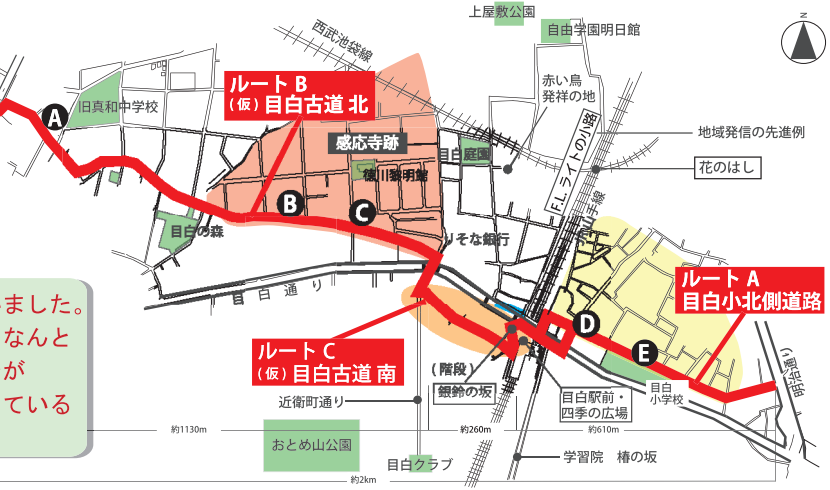
目白の魅力と改善点

H21年度アンケート調査



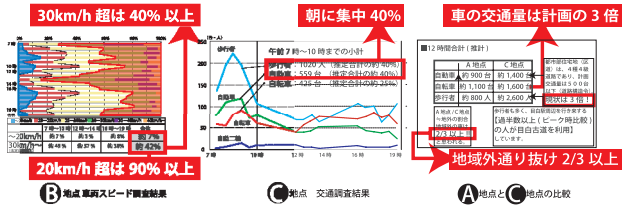
平成21年度にルートBの利用状況、改善点、
魅力を把握するために、沿道地域の方にアンケート調査を行いました。

交通量調査やスピード調査を行いました。
対象地区の交通量は計画交通量のなんと
3倍！！ 場所によっては2台に1台が
30km/h以上の違反スピードで走っている
という結果が出ました。



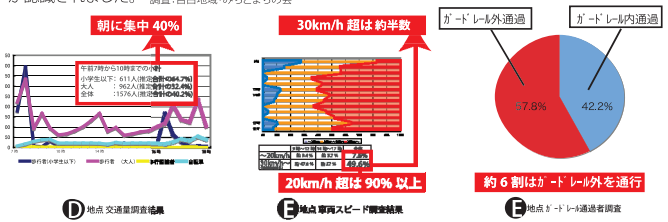
目白古道 北の交通調査

平成21年9月17日に現在の利用状況や交通状況を把握するため交通調査を行いました。
許容量の限界状況であることが認識されました。 調査:目白まちづくり倶楽部、山紫町会



目白小北側道路の交通調査

平成22年12月8日(交通量調査)平成23年1月19日(ｽﾋﾟｰﾄﾞ調査)に現在の利用状況や交通状況を
把握するため交通調査を行いました。ルートBと同様に許容量をはるかに超える状況であること
が認識されました。 調査:目白地域・みちとまちの会



このプロジェクトの目標は、「地域発案・研究／行政協働の仕組み」を創ることです。
誰にでも最も関わりのある課題であり、最も身近な環境でありながら、
これまでその改善・向上を正面からとりあげられていなかった普通の住宅地を対象としています。
（目白まちづくり倶楽部）

東京都23区の順番

江戸城の北であった「城北」の由来と、現在の23区制にいたる東京府～大東京市～東京都への区の変遷を調べます。15区が設置されたのは明治11年、昭和7年には周辺の5郡を20区に再編し35区時代「大東京市」成立。昭和18年には東京都制設置、敗戦後昭和22年23区に整理されます。城北地域は、明治時代は区部ではなく北豊島郡でありました。区部外は、品川・内藤新宿・板橋・千住という四宿場を除いて農村地帯が取り囲んでいました。

明治15区の順番を列記する場合、宮城のある麹町区を起点に、時計回りに「の」の字を描くよう区の順がきめられました。麹町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川という順番です。区をひと回りしたところで、郡部でもう一回りします、荏原郡からはじめて、豊多摩郡、北豊島郡、南足立郡、南葛飾郡という順番になります。

震災を経て急激に都市化して、昭和7年大東京市35区時代をむかえ、旧15区部の外周、品川区を起点に、目黒、荏原、大森、蒲田、世田谷（以上旧荏原郡）、渋谷、淀橋、中野、杉並（以上旧豊多摩郡）、豊島、滝野川、荒川、王子、板橋（以上旧北豊島郡）、足立（以上旧南足立郡）、向島、城東、葛飾、江戸川（以上旧南葛飾郡）と、旧郡単位でひとまわり大きな「の」の字を描くわけです。20区が加わり35区となりました。戦後復興・昭和22年3月、35区は22区に整理統合され、同年8月、板橋区から練馬区が分離して23の特別区となります。

一括りに旧北豊島郡、（豊島）豊島区、（滝野川、王子）北区、（荒川）荒川区、（板橋）板橋区・練馬区の範囲を、城北と称する様ですが、さらに23区を西部16区と東部7区に分けると荒川区だけが東部に含まれ、城北（西部）は豊島・北・板橋・練馬の4区を称します。千代田区に（麹町・神田）中央区に（日本橋・京橋）等と税務署の管轄で旧15区の名残あり、不思議に思えた区分地図の順番も、成立の順で千代田を中心に「の」の字を描き表記されていたわけでありました。

（秋山　信行）

「まち歩き」

練馬区、板橋区、豊島区、北区の4つの区から成るJIA城北地域会は、設立以来、地域への理解を深める目的で、「まち歩き」を実践してきました。①王子、②目白、③雑司ヶ谷～都電、④練馬城南住宅団地～常盤台、と過去4回行ってきましたが、今回は、各地域を繋ぐものとして存在している、「河川」、「上水」、「街道」、「崖線」、「商店街」に注目し、4つの区を貫く「河川」である、石神井川に焦点を当てて特集しました。今後別の機会には、下流側に向かってまち歩きを行い、歴史、産業、自然、生活などの色々な角度からの切り口から分析していきたいと思います。

今回の石神井川まち歩き（練馬編）では、上流から流れて練馬に入った石神井川が、石神井公園の豊かな自然と融合して、その緑を河川沿いに広げていった様子や、氾濫対策のための護岸工事であると同時に、水の流れや自然に親しむ工夫がされていった経緯などを観察しました。古くは農業の地域であった練馬エリアが、近年になって住宅地へと移り変わっていく中で、石神井川の役割や姿も、人々の暮らしに合わせて変化していったと言えるでしょう。　（大川　宗治）

発 行 元：ＪＩＡ城北地域会
（社）日本建築家協会関東甲信越支部

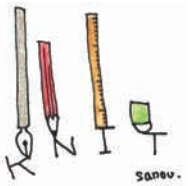
執 筆 者：秋山　信行　　磯部　和久　　大川　宗治　　久間　常生
柴田　知彦　　鈴木　和貴　　武田実代子　　信原　利行
林　　秀司　　松本　哲夫

イラスト：佐野　　綾

編　　集：吉田　　孝

問い合わせ・ホームページ：
http://www.jia-kanto.org/johoku/index.html
（入会の問い合わせなど）

発行年月日：２０１１年１１月１日



KNIT（ニット）・・北区のK・練馬区のN・板橋区のI・豊島区のT、城北4地域の頭文字をとった城北地域会の結束を示す造語です。

I
K
N
T
Sanou.